

ソーマ祭での複合型歌詠マントラ *stotra* に配される数の象徴性の工夫
 —— 数的符合(*sampad*)を手掛りとして ——

里見 英一郎

I. はじめに

本稿はシュラウタ祭式の一つであるソーマ祭系統(*soma-tantra*)の諸祭式の中で使われる *stotra* と呼ばれる複合型歌詠マントラに *stoma* という名で込られた数について神的存在との象徴的関連付けの工夫を概観する事を目的とする。取材したのは *stotra* を担当する祭官集団であるサーマ・ヴェーダ系伝承学派の一つ *Kauthuma* 派所属のブラーフmana文献¹である。

西洋に於いてピュタゴラスの名に代表されるような数に関する魔術的アナロジー(照応)は、程度の差はあれ、多くの文化圏で行われていた思考形態である。それらは祭事や日常生活の様々な要素の中に入り込んでいた。こうしたことが古代印度に於いても行われていたことは仏教を通じて古来より本邦にも伝わった「三宝」「十善」を始めとする法数から伺われよう(特に金剛乗系から)。信仰的要素から離れても、数は物の量だけでなく、思考型に不可欠な極めて身近なものであり、印度思想史上の用語の中にも幾つか登場する²。

祭式の中で用いられる数は祭式文献の中の儀軌(*vidhi*)や祭式解釈(*arthavāda*)の記述として例えば以下のように表現されているのが見られる。

TS II, 2, 1, 1: --- *aindrāgnam ekādaśakapālam nirvapet prajākāmah* --- //1//

インドラ・アグニに11枚のかはらけ焼き祭餅を献供すべし、子孫への願望ある者は³。

AB I, 5, 7-9: *anuṣṭubhau svargakāmah kurvita /7/ dvayor vā anuṣṭubhoś catuḥṣaṣṭir akṣarāṇi traya ima ūrdhvā ekaviṁśā lokā ekaviṁśatyai kavimṣatyai vevamāṁl lokān lohati svarga eva loke catuḥṣaṣṭitamena pratitiṣṭhati / 8/ pratitiṣṭhati ya evaṁ vidvān anuṣṭubhau kurute/9/*
 (7) *Anuṣṭubh* 韻律二つを天界への願望ある者は用いるべし。(8) 実に二つの *Anuṣṭubh* 韻律は64音節。これら上への21世界の3つぶん。つまり各々の21によってこの諸世界へ昇る。まさに天界に於いては64番目〔の音節〕によってしっかりと立つ。
 (9) このように知りつつ *Anuṣṭubh* 韻律の両〔マントラ〕を用いる者、彼は確立する⁴。

これだけからでも数は祭式の要素の可視的・可聴的なものとして見て取れるであろう。

数が、物質が存在するのと同様以上の意味で、実在する実体であるかどうかは古今東西多くの人々が考察し、現在の数学者の間でも決着が付いていない問題である。しかし乍ら科学でそれが用いられるのと同様にさしあたりは働き⁵として眺めるならば、祭式に於ける数に関する魔術的アナロジーは以下の思考法の一つとして位置付けることができるだろう。

祭式という磁場を媒介にして可視的な事物を不可視的な実体や力と象徴等置し、

可視的な事物を祭式上で操作することによって、それと等置関係に置かれた神秘的な実体をみずからのコントロールのもとに置くという呪術的方法⁶。

ヴェーダ文献を手掛りとした古代印度に於ける数の魔術的アナロジーの研究としては、

西洋のものとは比べると決して盛んであるとは言えないものの、古くは E. W. Hopkins や S. Schayer が行っている他、近年では J. Gonda が Veda 文献に於ける数 3 の問題を主題とした著作を発表し、本邦では松濤誠達の論文らが知られている⁷。

II. *stotra* の場面

ソーマ祭の式次第の様々な場面に於いて歌詠の形を採ったマントラがサーマ・ヴェーダ系の祭官によって詠われる。例えば、禊齋の儀(*dikṣaniyeṣṭi*)に於いてプラスタートゥル祭官単独によって *Tārksya* 旋律(*sāman*)と呼ばれる歌詠⁸が詠われるのに始まって、最後の締めくくりとなる儀礼(*udayaniyeṣṭi*)からそれに続く犠牲獣の儀に於けるもの⁹や終了後に祭主が日常生活に戻る為の儀礼(*udavasaniyeṣṭi*)で詠われるもの¹⁰に至る。祭官が単独で詠うこうした形態の歌詠に関してはソーマ祭系統以外のシュラウタ祭式の中にもそれらを次第に組み入れたものがある¹¹。一方これから取上げるストートラ(*stotra*)¹²と呼ばれるものはソーマ祭に特有であり、詠称数(*stoma*)¹³と呼ばれる特定数だけ詠い継がれた歌詠単位の集りである。

式次第の中ではソーマの護摩供が行なわれる搾献日(*sutyam ahah*)に斎場の先頭となる東側の部分に位置する大祭陣(*mahāvedi*)という大きな区画の中で祭官三人によって詠われる。

ストートラが詠われるのは先頭のもの¹⁴以外はこの大祭陣内でも西側に設けられた *sadas* と呼ばれる祭官小屋の中に於いてである。彼ら三人は所定の位置に座って、各自担当する部分(*bhakti*)ごとに詠い、ニダアナ部(*nidhana-bhakti*)と呼ばれる部分では唱和して詠う。

ストートラの数は個々のソーマ祭には最低でも 1 2 個あって各々の詠称の後にシャストラ(*śastra*)と呼ばれる複合的なリグヴェーダのマントラの朗誦を伴う。これは *sadas* 小屋内で歌詠祭官の東方に並んでいる 6 人の *R̥gveda* 系祭官中の 4 人によって、1 人につづつ交代で朗唱される。ストートラとシャストラは一対をなしているので、シャストラ(*śastra*)という用語がこの場面以外の *R̥gveda* の朗誦に対して付されることはない。この一対を核として前後あるいはその間の期間に於いてアーハヴァニーヤ祭火に中心献供となる神盃(*graha*)に入ったソーマの搾汁がアドヴァリュ祭官らによって護摩供に供される。

III. 神話的世界生成と *Jyotiṣṭoma* 祭に備わる諸 *stotra* 達の導入

ストートラは旋律付き詩節が定められた数だけ連なってできている。その数即ち歌詞の数 *stoma* (詠称数) がそのストートラの構造を決定する基本的条件となる¹⁵。それらを個々のストートラが使われる式次第の進行順に並べると以下の様な構成が出来上がる。以下は標準アグニシュトーマ方式の *Jyotiṣṭoma* 祭の場合である。太字で記した三つの数字はパヴァマーナ・ストートラと呼ばれるものであることを示す¹⁶。

朝の搾献の儀 昼の搾献の儀 第三の搾献の儀
(*prātaḥsavana*) (*mādhyandinasavana*) (*tr̥tīyasavana*)

9, 15, 15, 15, 15 / **15**, 17, 17, 17, 17 / **17**, 21

この祭式ではストートラ(*stotra*)の総数は 1 2 個である。PvB にはこれを起源として世界が開展される様子が神話的に語られる。まずは *Jyotiṣṭoma* 祭の名称の起源譚として暗黒の状態に光明が現れる場面である。

PvB XVI, 1, 1: *prajāpatir vā idam eka āsin nāhar āsin na rātrir āsīt so 'sminn andhe tamasi prāsarpāt sa aicchat sa etam abhy apadyata tato vai tasmai vy aucchad vyuṣṭir vā eṣa āhriyate yad vai taj jyotir abhavat tat jyotiṣo jyotiṣtvam //1//*

実にブラジャーパティが此処に一つ在った。昼は無かった。夜はなかった。この冥暗な闇の中で彼は這い進んだ。彼は欲した。彼はこの〔祭式〕に近付いた。すると実に彼へそれは輝き放った。実にこの曙光が〔ブラジャーパティにより〕取得された。それが実に光明(jyotis)となったこと、それが *Jyoti* (śtoma 祭) の「光明」(jyotis)¹⁷ の理由である。

PvB の別の箇所では アグニシュトーマという名称が現れる。ブラジャーパティは以下のよう
にこのアグニシュトーマ方式の *Jyotiṣtoma* 祭を用いて世界を形成して行った。

PvB VI, 1, 1: *prajāpatir akāmayata bahuh syām prajāyeyeti sa etam agniṣtomam apaśyat tam āharat tenemāh prajā asṛjata //1//*

ブラジャーパティは望んだ「私は多数なものとなろう、増殖しよう」と。彼はこのアグニシュトーマを観た。それを取得した。そうする事でこれら生類達を創造した。

さて、ブラジャーパティ神は先ずアグニシュトーマに備わるストートラに拠って十二ヶ月からなる一年を作って¹⁸から後、祭祀を造りたいと望んで身体の諸部分から様々なものを造り出して行く。その様子を語る記述¹⁹にはブラジャーパティ神がアグニシュトーマと呼ばれる祭式を用いて自ら分かれて世界を造っていくモチーフが描かれる²⁰。それを表にして示すと以下のようなになる²¹。左上から順に生み出されて行く。

PvB,VI,1, 身体	詠称数	韻律 ²²	神格	種姓	季節	その他
6-7	口	9	Gāyatrī(24)	Agni	バラモン	春
8-9	胸・腕	15	Trīṣṭubh(44)	Indra	クシャトリア	夏
10	腹	17	Jagatī(48)	Viśve devāḥ	ヴァイシュヤ	雨期
11	足	21	Anuṣṭubh(32)	×	シュードラ	確立

ここに示された諸存在は祭式解釈での等置表現にしばしば登場することとなるもの達である。そして続く節 PvB VI, 2 では *Jyotiṣtoma* 祭の各々の詠称数に等置の対象が補足されてさらに新たな数達も追加される²³。

9 : 氣息, 15 : 半月, 17 : 一年, 21 : 太陽, 27 : 地界, 33 : 神々
アグニシュトーマと呼ばれる *Jyotiṣtoma* 祭が世界の原形として描かれているわけだが、*Jyotiṣtoma* 祭の式次第に配置された詠称数の進行はまさに頭から足へと即ち天から地へと降りてゆくことと創造の過程が重なっていると見る事ができるのである。

IV. ストートラの数配列一般に込められた枠組み的観念。

さて前述のようにアグニシュトーマのストートラの数創造の際からの一年であって、原形として機能してそこに各々の詠称数が配置されることになるのだが、そのストートラの個数に関して地上の繁殖と関連させて新たに意味付けがなされてもいる。

PvB VI, 3, 3: *dvādaśa stotrāṇy agniṣtomo dvādaśa māsāḥ samvatsarah samvatsaram paśavo*

'nu prajāyante tena paśavyaḥ samṛddhaḥ //3//

アグニシュトーマ方式〔Jyotiṣṭoma 祭〕は12個のストートラ達、一年は十二ヶ月、一年で家畜達は順に産まれる。それによって家畜に関わる繁盛がある。一年はまた以下のように創造主ブラジャーパティとも等置されることがある²⁴。

PvB XVI, 4, 12: --- dvādaśa māsāḥ samvatsaraḥ samvatsaraḥ prajāpatiḥ ---//12//

… 一年は十二ヶ月。ブラジャーパティは一年。…

ストートラの進行が一年と関わっていることは判ったが、詠称数自体は如何なるものとされていたのだろうか。それを示すのが *Vājapeya* 祭のストートラに関する祭式解釈の記述である。*Vājapeya* 祭の詠称数構成は以下の様に定まっております²⁵、それに対して言われる。

17, 17, 17, 17, 17 / 17, 17, 17, 17, 17 / 17, 17, 17, 17, 17

PvB XVIII, 6, 2-5: yāvān vai prajāpatir ūrdhvas tāvāms tiryāṇ //2// yāvanta ime lokā ūrdhvās tāvāntas tiryāṇcaḥ //3// vājapeyayājī vāva prajāpatim āpnoti //4// yat saptadaśa stotrāṇi tenorddhvam āpnoti yat sarvaḥ saptadaśas tena tiryāṇcam //5//

(2)ブラジャーパティは実に上方に〔広がって〕いる分、それだけ横方向に〔広がって存在して〕いる。(3)これらの諸世界は上方に〔広がって〕いる分、それだけ横方向に〔広がって存在して〕いる。(4)まことに *Vājapeya* 祭を祭祀する者はブラジャーパティに達する。(5)17個のストートラ達があることは、それによって上方を彼は得る。一切が〔詠称数〕17であること、それによって横方向を得る。

人間の通常な身体感覚として、立ち上がった姿勢で天により近い頭部という器官を上方(縦)とするにしても、ここで述べられる上方・横というのは単純に可視的世界の縦横ではない。縦とされるものは前節に挙げた世界創造に於ける宇宙的身体²⁶のモチーフと重なる。それに拠ると時系列的に配置される *stotra* の個数の増加が縦への拡大となる。即ちここでは17で象徴される一年を周期としてブラジャーパティが三界に拡がると解しうる。

一方で横への拡がりとは個々の *stotra* にある詠称数の増加となる。果たして *stotra* の進展に応じた詠称数の増加が上昇として理解された事を示す *Vrātyastoma* 祭第四型²⁷の用例もある。

PvB XVII, 4, 2: agrād agraṃ rohanty ūrdhvāḥ stomā yanty anapabhramśāya //2//

尖端から尖端へ彼らは登る。上昇的な諸詠称数が進行する、零れ落ちない為に。

従って詠称数はそれが属する個々のストートラが詠われる時点での三界への様々な広がりとして理解されるであろう²⁸。

V. 個々の祭式の中に配される詠称数に込められた観念

ブラーフマナ文献の記述の中で数には創造の時点で関連づけられたもの以外にも様々な宇宙的な諸力が照応していることが以下のような等置表現によって説明される。

tejo vai trivṛd brahmavarcasam 詠称数9は実に鋭光、ブラフマン的威光(PvB XVII, 6, 3)

prāṇo vai trivṛt prāṇa ādityaḥ 詠称数9は実に氣息。氣息は太陽。(PvB XVI, 13, 2)

ojo vīryam pañcadaśa 15は雄々しさ、活力。(PvB XIX, 16, 4)

prajāpatir vai saptadaśaḥ 17は実にブラジャーパティ。(PvB XVIII, 7, 5)

pratiṣṭhā vā ekaviṁśaḥ 21は実に確立。(PvB XVII, 2, 3)

(但し、括弧内の出典は数ある用例中の一例に過ぎない。)

他にも Kauthuma 派に於いては以下の数達²⁹がソーマ祭の詠称数として使われる。

1, 3, 4, 8, 9, 10, 11, 12, 14, 15, 16, 17, 18, 21, 24, 27, 28, 33, 36, 44, 48

これらは組み合わせられて以下の諸例のように解釈される。

Samdamśa 祭では二つの同じ詠称数が並ぶのをやっこ(*samdamśa*)に見立てることによって、呪詛相手を捕まえる作用が期待される。

詠称数構成³⁰ : 9, 9, 12, 12, 15 / 15, 21, 21, 24, 24 / 27, 27

ŚvB III, 10, 4: *yad dvau dvau stomau saha yathā ha durādānam samdamśenānu hāyādādītaivam evainam etenādatte //4//*

二つずつ詠称数が並んでいるのは、実に恰も手に取れない物をやっこによって捕まえて手に取り得るように、つまりこのように彼の者(呪詛の相手)をこれ[なる祭式]によって彼は手に取る。

Go 祭という祭は祭名からして牛である。この祭式の詠称数構成を利用して果報となる牛の姿が見立てられている。

詠称数構成³¹ : 15, 9, 9, 9, 9 / 17, 17, 17, 17 / 21, 21, 21, 21, 21

PvB XVI, 2, 6: *paśustomo vā eṣa evam iva vai paśuḥ samāhitaḥ śiraḥ sthaviyo 'nīyasyo grivā pārśvābhyām variyām sakthibhyām varīṣṭhaḥ //6//*

これ[なる祭式]は実に家畜[形の]詠称数を持つもの。実にこのようにある如くに家畜は出来上がっている。頭部は大きめ。頸部は小さめ。両脇を以ってはより大きい。両腰部を以っては最も大きい。

より抽象的となるが、奇数と偶数を共に配して番の表象を形作るものがある。以下に示す(*Āngirasām*) *Anukri* 祭の果報の一つには[子孫の]繁殖がある。

詠称数構成³² : 9, 9, 9, 9, 9 / 24, 9, 9, 9, 9 / 24, 21

PvB XVI, 14, 6: *ubhaye stomā yugmantaś cāyujāś ca tan mithunam asmād mithunāt prajāyate //6//*

両種の詠称数[即ち]偶数のものらと奇数のものらとが[用いられる]。それはつがいである。このつがいから繁殖する。

VI. ストートラの総体と韻律との類似性

さてこのように様々な観念が折り込まれる詠称数は一つ違っても意味が変わるので正確に遵守される必要があった。数は三名の Sāmaveda 系歌詠祭官中のプラスタートウル祭官が数える。特に同じ旋律の上に二三個の詩節が入り組んで歌詞が繰り返される配詠法(*viṣṭuti*)が使用されるストートラでは算木を前に並べて数を数える。しかしそれでも実際問題としては歌詞を抜かしてしまったり詠い過ぎてしまったりする事態はどうしても発生してくるので、それへの対策としての修復法(*prāyaścitti*)が定められている。その第一段階として次に詠われるストートラの詠称[詩節]数を調整することで数を合わせることが行なわれた。

PvB IX, 3, 7-9: *yad arvāk stuvanti tad astutaṃ yat samprati stuvanti tat stutaṃ yad atiṣṭvanti tat suṣṭutaṃ //7//*

[定められた詠称数の] 手前迄詠うなら、それは詠われていないもの。丁度に詠うなら、それが詠われたもの。詠い過ぎるなら、それは詠い余るもの。

yady arvāk stuyur yāvatibhir na stuyus tāvatibhir vātiṣṭuyur bhūyo 'kṣarābhir vā //8//

もし手前迄に詠うようなら、詠わなかった分、その分だけ余計に詠うかあるいは音節数でより多く詠うべし。

yady atiṣṭuyur yāvatibhir atiṣṭuyus tāvatibhir vā na stuyuh kaniyo 'kṣarābhir vā //9//

もし詠いすぎるなら、詠いすぎる分、その分だけ詠わないかあるいは音節数でより少なく詠うべし。

そしてこの後、最後のアグニシュトーマ・ストートラの詠称に際してニダアナ部(nidhana)が工夫されることで³³祭式修復が完了するのだが、このように詠称数の総計さえ合えば差し支えないと看做されていることは、詠称数が個々のストートラに所属するだけでなく、搾献日のストートラ全体として一つのものとして意識されていたことを意味する。

このようなことは韻律に於いて音節構成が異なっても総計が同じ数となるものが一つと同じグループとして分類されていることと似ている。以下の例は詩型が異なっても同じ Gāyatri 韻律の詩節である³⁴。

agnim ile purohitam yajñasya devam rtvijam /

hotāraṃ ratmadhātamaṃ // RV I, 1, 1

Tripadā gāyatri (8+8+8)

sa sunve yo vasūnām rāyām ānetā ya ilānām /

somo yah sukṣutinām // RV IX, 108, 13

Yavamadyā gāyatri (7+10+7)

agne mṛla mahām asi ya imā devayum janam /

iyetha barhir āsadam // RV IV, 9, 1

Vārāhi gāyatri (6+9+9)

つまり多くの変種がある一般的な韻律の場合には、単に何某韻律という言葉からは音節数の情報しか得られないわけであって、それに対して言及されることは、とりもなおさず詩型ではなく、数そのものに対してなされていることになる。従って韻律に関しては個々の行数やその音節数と共に総音節数として考慮されていることに留意する必要がある。このことからソーマ祭の搾献日一日のストートラは韻律と相似するものであり、ストートラの数、個々の詠称数そして詠称数総計がそれらと対応することが理解できる。

VII. 数的符合(sampad)を利用した解釈の工夫

ブラーフマナ文献の祭式解釈に時折見られる「数的符合」する(sampadyate)という表現がある。これはサーマ・ヴェーダ系のもものでは唐突に出される韻律の名称と共に示される。

brhatim sampadyante Brhati 韻律に数的符合する。(PvB XVI, 12, 7)

virājam sampadyate Viraj 韻律に数的符合する。(PvB XVI, 13, 3)

gāyatriṃ sampadyate Gayatri 韻律に数的符合する。(PvB XIX, 7, 7)

これと類似な表現に以下のものがある。

PvB XIX, 3, 9: *dve samstutānām virājam atiricyete* --- //9//

称え詠われた〔詠称詩節達の〕中で2つが Virāj 韻律を字余りする。

後者から詠称数の総和について、韻律の音節数との関わりを述べたことであると判る。

この記述の中で「字余りする」(atiricyate)として示されたものを除いて、その残りは符合していることになる。数的符合する部分及び前者三例は字余りが0の場合と考えられる。

a. 照応の手掛りとなる数的符合(sampad)

これらの表現の背後には数を合わせる事によって特定の数が属するあるものの性質を同様な別のものにも読み込もうとする発想がある。言い換えれば数を介してあるものと目的のものを対応させる事と言えよう。これは sampad と呼ばれている³⁵。この語については A. Minard が簡潔な解説を与えており、そこではマントラの音節数等といった諸々の祭式要素に表れた数を解釈の中で合計することによって目的とする事柄に関わる数も祭式中にあると見立てる Śatapathabrāhmaṇa での祭式解釈の例が言及される³⁶。J. Gonda は3に関する前述の研究の中で sampad も言及した際、この語に対して「数的合同」(numerical congruence) という訳語を与えている³⁷。

ここで二つの数の倍数と余りの関係である数的符合の概念を簡単に扱う為に、整数論で用いられている合同数(congruent number)の概念と記号を導入したい。以下の引用によって合同数の概念は昔からごく日常的に使われている感覚的なものと言ってよいものであり、受け入れられている文化によって導入されたりなりなくなったりする類のものではないことが理解できるだろう。数学史上では類体論の開拓者として名高く、日本国に於ける初等整数論の標準的な教科書の著書である高木貞次(1875-1960)は同書の中³⁸で合同数についてつぎのように説明する。

整数 a, b の差が m の倍数であるとき、 a と b とは m を法(modulus)として互いに合同であるといい、それを次のように記す。

$$a \equiv b \pmod{m}. \quad \text{これは Gauss}^{39}\text{の記法である。}$$

合同とは congruent の訳語であって、それは幾何学でいう合同と同語である。

$a \equiv b \pmod{m}$ とは m の倍数なる差を無視すれば、 a も b も同じであるというように考えるのである。あたかも二つの合同な図形が、位置の差を無視すれば、全く合致するのと同様である。

合同ということは整数論において基本的である。しかし日常生活においても、普通に応用されているともいえよう。朝は五時に起き、夜は十時に寝るのは24時間を $mod.$ として生活を律するのである。暦は一年を $mod.$ として季節を定める。また干支、七曜などは10, 12, 7などを $mod.$ とする合同に基づく。

印度では一年に巡る季節の観念が数通りもあった他⁴⁰、何年かで循環する時の概念もあった⁴¹。この記述にそれを当て嵌めて言うところある時点に関して季節を別の季節の基準で測るといつ頃に相当するのかを考える場合には各々 mod を切り替えて日数を測ることになる。

古代インドでは我々も日常で普段から身近に使用している十進法が用いられていた⁴²が、それは手指の範囲以上の数を数える時に10を mod とする合同数の観念が使用されたことを

意味する。ではその観念が用いられる数的符合の使用に拠ることの利便を覗てみよう。

ブラヂャーパティは一年と関わる17のみならず、34とも等置されることがある。この34とは一体何であるのか。Brhaspatisava祭では祭儀布施に供される家畜達の数によってこの34が表される。それについて次のように祭式解釈がなされている。

PvB XVII, 11, 3: *trayastrimśad etā dakṣiṇā bhavanti trayastrimśad devatā devatā evāpnoty aśvaś catustrimśo dakṣiṇānām prajāpatiś catustrimśo devatānām prajāpatim evāpnoti*//3//

これらの祭儀布施〔動物〕達は33頭となる。神格達は33柱。つまり神格達に彼は達する。布施動物達の34番目は馬。諸神格の中で34番目はブラヂャーパティ。つまりブラヂャーパティに彼は達する。

ここで $34 = 17 \times 2$ であることは明白であるから、両者に合同数の方式を当て嵌めて書いてみよう。先ずブラヂャーパティの数17をmodにとる。そして $a=34, b=17$ とすれば、

$$34 \equiv 17 \pmod{17} \quad \text{と書く事ができる。}$$

これは34が17と数的符合をする17的な数であることを示している。つまり34は質的に17なのである。最初から17頭の祭儀布施として表すのではなく、各々の捧献の儀ごとに祭儀布施を行なうという変則的な式次第によって神々の数33を形作るのはこの祭式独自の工夫である⁴³。以上のようなある数の中に別の数を覗ようとする態度は、日常生活に於いて行なわれる事物の数え方のような数量としてではなく、質として扱うことを意味する。このような見方はその場限り特殊な解釈の技術ではなく、祭祀に於ける数に対する基本的な視点として、誰でも手の触れ得るところに表れている。

20という数の中にはその因数である5を見ようとする気持ちが祭官達の心性に働くことがあったことを以下の記述が示している。

(Gautamasya) Catuṣṭoma 祭 第一型

詠称数構成⁴⁴: 4, 8, 8, 8/12, 16, 16, 16/20, 24

… 総計: 156

PvB XIX, 5, 7: *yad viṃśa ārbhavaḥ pāṅktatvam eṣām tad āpnoti* //7//

アールバアヴァ・パヴァマーナ・ストートラが詠称数20であることは、そうすることでこれら(家畜)が五種⁴⁵であることを得る。

これは $[20 \equiv 5 \pmod{5} \cdot 20 = 5 \times 4]$ が意識されていた証拠であると考えられる。

数的符合即ち合同数の基準を大きな数、例えば68に当て嵌めてみると、 $68 \equiv 34 \equiv 17 \pmod{17}$ である。数量的には多くても、数の質として68は17よりも決して大きな数ではなく、17が潜んでいる数ということになる。従って天により近づく為に無闇に大きな詠称数をストートラに配する必要は全くないことが判るだろう。

合同数を応用すると字余りの概念も同じように扱える。18は17より1大きく、17で割ると1余る数である。35は17よりも18大きい数であるが17で割ると1余る。これに合同数の式を当て嵌めると $18 \equiv 35 \pmod{17}$ が成り立つ。従って、いくら大きくてもこれらは17を基準とした世界の中では1でしかないことになる。

b. 韻律との照応

ある韻律に対して詠称数が数的符合するかまたは割り切れずに余りがあると考えるのは詠称数を韻律に割り当てられた数である音節数との剰余関係に於いて考察することであるから、こうした判断はとりもなおさず、韻律の数を *mod.*として考えることである。以下幾つかの例を挙げる。

<Br̥hati 韻律> 音節数： $8 + 8 + 12 + 8 = 36$

最も多くの用例がある数的符合の例である。*Sādyaskra* 祭(第一型)の幾つかある果報の内で天界と家畜に対して以下のように述べられる。

Sādyaskra 祭(第一型)

詠称数構成⁴⁶： $9, 9, 9, 9, 9 / 9, 9, 9, 9 / 9, 9$

… 総計： $108 [108 \equiv 36(\text{mod. } 36) \therefore 108 = 36 \times 3]$

PvB XVI, 12, 6-9: *svargakāmo yajeta //6// br̥hatīm sampadyante br̥hatyā vai devāḥ svargam lokam āyan svargam evaitena lokam āpnoti //7//*

(6) 天界への願望ある者が祭祀すべし。

(7) Br̥hati 韻律に数的符合する。実に Br̥hati 韻律によって神々は天上世界に赴いたつまりそうすることにより天上世界に彼は達する。

paśukāmo yajeta //8// paśavo vai br̥hatī paśuṣv eva pratitiṣṭhati //9//

(8) 家畜への願望有る者が祭祀すべし。

(9) Br̥hati 韻律は実に家畜達。つまり家畜達に於いて彼は確立する。

<Virāj 韻律> 音節数： $10 + 10 + 10 + 10 = 40$

この韻律は通常は総音節数が 40 となるものである。一方、Pañkti 韻律ともいわれる 5 を基調とした韻律と重なる部分があり、多くの変種がむしろその名で呼ばれる⁴⁷。ここでは 10 で割れない純粋な Pañkti 韻律については考察から除外することとする。

食糧供給を目的とする *Sāhasra* 祭(第二型)については以下の様に解釈されている。

詠称数構成⁴⁸： $9, 15, 15, 15, 15 / 17, 17, 17, 25, 17 / 17, 21$

… 総計： $200 [200 \equiv 40(\text{mod. } 40) \therefore 200 = 40 \times 5]$

PvB XVI, 9, 5: *virājam sampadyate 'nam virāḍ annādyam evāvarundhe //5//*

Virāj 韻律に数的符合する。Virāj 韻律は実に食糧。つまり食糧供給を彼は確保する。

c. 新たな詠称数の見立て

韻律に於いて音節数として共通する場合に脚数が異なる変種があり得るように、詠称数の場合にもストロラの数に関わり無く、別の詠称数が存在していると見立てられることがある。*Vighana* 祭(第一型)は最も念入りに構想された詠称数構成をしている一つである。

詠称数構成⁴⁹： $9, 9, 12, 12, 15 / 17, 21, 19, 24, 24 / 27, 27$

… 総計： $216 [216 \equiv 36(\text{mod. } 36) \therefore 216 = 36 \times 6]$

これを Br̥hati 韻律との数的符合に止めることなく、以下のように並べた姿を見立てている。

$$216 = 36 + 36 + 36 + 36 + 36 + 36$$

36 は Br̥hati 韻律の音節数であり、Br̥hati 韻律を個々に家畜と等置させて家畜が 6 頭並んで

いる姿に見立て、さらに新たに出来た数字6に一年の中の六季をも読み込んでいる。

PvB XIX, 18, 4-5: *paśukāmo yajeta br̥hatīm sampadyate paśavo vai br̥hatī paśūn evāvarundhe*
//4// *ṣaḍ etā br̥hatyo bhavanti ṣaḍ ṛtavaḥ samvatsavara*⁵⁰ *samvatsaraṃ paśavo 'nu*
*prajāyante tān evāpi*⁵¹*varunddhe* //5//

(4)家畜への願望ある者は祭祀すべし。Br̥hati 韻律に数的符合する。Br̥hati 韻律は実に家畜達。つまり家畜達を確保する。

(5)これらの詩節は6つのBr̥hati 韻律。1年は六つの季節。1年後に家畜達は産まれてくる⁵²。つまり それら [1年] を得て彼は確保する。

d. 余りの有効利用

先に挙げたGo祭では詠称数の組み合わせによって牛の姿が見立てられたが、尻尾がなかったので、詠称数総計241に関して数的符合の余りを利用して牛の尻尾が付けられる。

詠称数総計 $241 = 240 + 1$, $240 \equiv 10 \pmod{10}$

PvB XVI, 2, 8: *ekā samstutānām virājam atiricyate tasmāt paśoḥ paścād atiriktam* //8//
称え詠い終えられたなかで一つがVirāj 韻律に字余りする。其れ故に家畜には後方に余り [の部分] がある。

この例の中でおそらく牛の胴体に相当すると推測されるVirāj 韻律に関しては韻律そのものとしての等置の用例は確認できないが、観念としての連携を思わせる以下のような用例がPvBに収録される⁵³。

PvB IV, 9, 3: *gor iti nidhanaṃ bhavati virājo vā etad rūpaṃ yad gaur virājy eva prati*
tiṣṭhanti//3//

牝牛(gor)というニダァナ部が用いられる。牝牛なるもの、これはVirāj (光り輝くもの)の表れ。つまりVirājに於いて彼らは確立する。

Sāhasra祭第一型に関する以下の文章からは詠称数総計が二つの数の約数となっていることに対して一見すると数的符合が見出されているかのようにみえるが、そうではなく、余りの部分に改めて別の数を符合させる解釈である。

詠称数構成⁵⁴ : 9, 15, 9, 15, 9 / 17, 17, 15, 25, 17 / 21, 21 … 総計 : 190

PvB XVI, 8, 8-9: *trivṛtams stomaṃ sampadyate virājam chandaḥ* //8//

prāṇo vai trivṛd annaṃ virāṇ na vaiva prāṇa ṛte 'nnāt pārayati nānnaṃ ṛte prāṇāt prāṇeṣu
caivānādye ca pratitiṣṭhati //9//

(8)詠称数9に数的符合する。Virāj 韻律に [数的符合する]。

(9)詠称数9は実に氣息。Virāj 韻律は食物。つまり氣息は食物から離れては実に [軀を] 保存させない。食物は氣息から離れては [軀を保存させない]。つまり諸々の氣息と食糧供給とに於いて彼は確立する。

総計190は $190 \equiv 10 \pmod{10}$ であるから10で代表されるVirāj 韻律とは符合するが、詠称数9とは符合しない。しかし $190 = 9 \times 20 + 10$ であることを利用すれば、 $180 \equiv 9 \pmod{9}$ と $10 \equiv 10 \pmod{10}$ つまり9と10という数が並んでいる姿、即ち氣息と食物が並んでいる姿が見立てられる。

VIII. 結語

以上をまとめると、次のように言えるだろう。

stotra には歌詞の数として盛り込まれた詠称数(stoma)が単に宇宙的原理と照応させる為に吉数として置かれたのみでなく、その大小関係を利用して形象が描かれたり、全 *stotra* を一体と捉える事によって恰も韻律のように再配分されたり、整数の性質に基づいた数的合同の観念を活用したりする祭式解釈が重層的になされる事に基づいて数が配されている。

<略号および使用テキスト>

- AB** *Das Aitareyabrāhmaṇa*, ed. by Theodor Aufrecht, Bonn: Adolph Marcus, 1879
(repr. Hildesheim: Georg Olms Verlag, 1975).
英訳 : *Rigveda Brāhmaṇas: The Aitareya and Kauṣītaki Brāhmaṇas of the Rigveda*,
trans. by A. B. Keith, Harvard Oriental Series 25, Cambridge, MA: Harvard University
Press, 1920 (repr. Delhi: Motilal Banarsidass, 1971).
- ĀrṣK** *Ārṣeyakalpaḥ: Ārṣeyakalpa of Maṣaka with the Commentary of Varadarāja*, critically
ed. with introduction by B. R. Sharma, Vishveshvaranand Indological Series, 68,
Hoshiarpur: Vishveshvaranand Vedic Research Institute, 1976.
- RV** *Ṛgveda-Saṃhitā, with the commentary of Sāyaṇācārya*, 5 vols, Poona: Vaidika
Saṃśodhana Maṇḍala, 1933-51.
- KṣudS** *Kṣudrakalpasūtram: Kṣudrakalpasūtra of Maṣaka Gārgya with The Commentary of
Shrī Shrīnivāsa*, critically ed. by B. R. Sharma, Panjab University Indological Series, 1,
Hoshiarpur: Vishveshvaranand Vishva Bandhu Institute of Sanskrit and Indological
Studies, 1974.
- TS** *Taittirīya Saṃhitā, with the padapāṭha and the commentaries of Bhaṭṭha Bhāskara
Miśra and Sāyaṇācārya*, ed. by N. S. Sontakke, T. N. Dharmadhikari and S. L.
Athlekar, kāṇḍa I-IV, 5 vols, Poona: Vaidika Saṃśodhana Maṇḍala, 1970-1990.
- PvB** *Pañcaviṃśabrāhmaṇa = Tāṇḍyamahābrāhmaṇa: With the Commentary of Sāyaṇācārya*,
ed. by Ānandacandra Vedāntavāgīśa, Bibliotheca Indica, 62, 2 vols, Calcutta: Ganesa &
Ramayana Press, 1864-1874 (repr. Delhi: Chaukhamba Sanskrit Pratishthan, 1989).
英訳 : *Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa: The Brāhmaṇa of twenty five chapters*, trans. by
W. Caland, Bibliotheca Indica, 255, Calcutta: The Asiatic Society, 1931 (repr., 1982).
- MS** *Maitrāyaṇī Saṃhitā*, hrsg. von L. von Schroeder, 4 Bde., Leipzig, 1881-1886.
- ŚvB** *Ṣaḍviṃśabrāhmaṇam Vijñāpanabhāṣyasahitam*, ed. by H. F. Eelshingh, Leiden: Brill, 1908.
英訳 : *Ṣaḍviṃśa-Brāhmaṇa: Introduction, Translation, Extracts from the Commentary
and Notes*, by W. B. Bollée, Utrecht, 1956.

(注記)

- 1 *Pañcaviṃśabrāhmaṇa* と *Ṣaḍviṃśabrāhmaṇa* を *Ārṣeyakalpa* と呼ばれるスートラ文献を参照しつつ利用する。
- 2 *sūnya* (零；空) や *advaita* (不二元) 等という用語がよい例である。
- 3 願望的供撰祭(*kāmyeṣṭi*) に於ける護摩供の供物に関する記述。
- 4 ソーマ祭系統の諸祭式の初段にある禊斎の儀(*dikṣaṇieṣṭi*)の中で行われる護摩供に際して唱えられる勸請句(*puro'ṇvākya*)と献供句(*yājya*)に使われるマントラの韻律に関して述べられている。
- 5 ものの量を表す数は基準となる単位系が入れ代われば入れ代わるので、特定の数がものの量と不可分な存在でないことは明らかである。個数についても数え方の基準で変化するので例外ではない。
- 6 Cf. 井狩 [1989], p. 60.
- 7 Cf. Hopkins [1894], Schayer [1925], Gonda [1976b], 松涛 [1983].
- 8 Cf. Caland et Henry [1906-7], pp. 15-16. 尚、慣用的に *gāna* という語は歌詞と共に暗唱された形態の歌詠に対して使用し、使われる歌詠を呼ぶ場合には旋律 (*sāman*) という語を添えて示されることが多い。指定により、旋律記憶用に暗唱されている歌詞とは別の詩節が歌詞となることもある。以下この節の祭式記述は Caland et Henry [1906-7]の中の諸々の当該箇所に拠る。
- 9 *Udvad bhārgava* 旋律と呼ばれる前者は Cf. Caland et Henry [1906-7], p. 406. 後者は Cf. *ibid.*, p. 407.
- 10 Cf. Caland et Henry [1906-7], p. 412.
- 11 既婚男性が三つの祭火を持つ祭主としてシュラウタ祭式を挙行し得る者 (*āhitāgni*) となる為の特別な人生儀礼である *Agnyādhya* 式に於けるものは Cf. Krick [1982], pp. 55-56; 294-295; 410-414.
- 12 伝承学派によっては *stuti* ともいう。例えば現代ではケーララ州のバラモンの *Nampūtiri* 氏族に伝わる *Jaiminiya* 派に於いて。因に *stotra* や *stuti* という語はヒンドゥー諸教・信仰の中では御詠歌の一種を指す。
- 13 *stoma* は語源的には $\sqrt{stu-}$: 「称える」を語根とする語である。また文脈によっては祭式を意味することがある。例えば、サットラ型ソーマ祭では構成祭式のことでもある。尚、詠称数という訳語は筆者による造語である。日本語の「えいしょうする」という単語に充てられる漢字は「詠唱」であるが、意味を採って「詠称」漢字を使った合成動詞を造語してその語幹と「数」を組み合わせた。
- 14 最初のストートラである *bahiṣpavamānastotra* だけは祭官小屋 (*sadas*) の中では詠われず、祭官達は一旦その中から外へ出て大祭陣内の東北の *āstāva* と呼ばれる場所まで連なってしゃがみながら進んで行く所作 (*prasarpaṇa*) によって移動した後、そこで詠われることになる。 Cf. Caland et Henry [1906-7], pp. 169-181.
- 15 *stotra* の構成要素には詠称数 (*stoma*) 以外に詠称詩節 (*stotriyā*) の意味・その本来の韻律・詩節の組み合わせ方 (配詠法, *viṣṭuti*) ・拍子音 (*stobha*) ・旋律 (*sāman*) ・ニダアナ (*nidhana*) 等があるが、煩雑となるので説明は割愛する。 *stotra* の詳しい解説は Cf. van der Hoogd [1929]. さらに *nidhana* については Cf. Sharma [1976].
- 16 これら三つのストートラはその内部の構成やその詠われる局面に行われる諸儀礼が変化に富んでおり、その他のストートラ達とは明白に区別される。祭主と祭官達によるソーマの共飲が行なわれるのはこれらのストートラと対応するシャストラの間である。この期間は朝の搾献の儀では非常に多くの護摩供が行なわれる。昼の搾献の儀では祭官達へ祭儀布施 (*dakṣiṇā*) の贈呈がある他、祭式によっては様々な祭礼的儀礼が行なわれる。そして第三の搾献の儀では大祖霊祭 (*mahāpitryajña*) が行なわれる。 Cf. Caland et Henry [1906-7].
- 17 この光明は *Virāj* 韻律と関連づけられる。 *PvB VI, 3, 6: kim jyotiṣṭomasya jyotiṣṭomatvam ity āhur virājam samstutam sampadyate virāḍ vai chandasām jyotiḥ //6//* 何故 *Jyotiṣṭoma* 祭は *Jyotiṣṭoma* という名であるのかと人々は言う。称え詠われたものが *Virāj* 韻律に数的符合する。実に *Virāj* 韻律は諸韻律の中の光明。
- 18 Cf. *PvB VI, 1, 2*. 先ず 1 1 個のストートラによって 1 1 ヶ月を造って 1 2 番目のストートラで 1 2 ヶ月からなる一年と祭式はしっかりと結びついた。
- 19 Cf. *PvB VI, 1, 6-11*.
- 20 これは *RV X, 90* にある *Puruṣa-sūkta* の中に描かれた原初の祭祀や原人解体等と共通する点を持つ。
- 21 典拠が異なるので細部は若干異なっているが、類似した対応関係の図表が発表されている。 Cf. Tsuchida [1979], pp. 133-134, n. 5-4.
- 22 *Gāyatri* 韻律 (*chandas*): $8 + 8 + 8 = 24$; *Triṣṭubh* 韻律: $11 + 11 + 11 + 11 = 44$;
Jagatī 韻律: $12 + 12 + 12 + 12 = 48$; *Anuṣṭubh* 韻律: $8 + 8 + 8 + 8 = 32$
- 23 Cf. *PvB VI, 2, 1-9*.
- 24 Gonda [1976 a] は *プラチャーパーバティ* と一年との関連に関するヴェーダ文献の用例研究である。
- 25 *ĀrṣK IV, 13, 4: sarve saptadaśāḥ //4//*; *PvB XVIII, 6, 1: saptadaśa ukthā ṣoḍaśimān saptadaśi //1//*

- ウクタ部達は〔詠称数〕1 7. ショーダスイ (十六番) ストートラを持つもので、1 7番があるもの。
PvB XVIII, 7, 5: *sarvaḥ saptadaśo bhavati prajāpatir vai saptadaśaḥ prajāpatim evāpnoti //5//*
一切が1 7となる。1 7は実にブラジャーパティ。つまりブラジャーパティに彼は達する。
尚、ストートラの数はそのまま捧献日一日(ekāha)についてのソーマ祭の様々な方式 (agnīṣṭoma, ukthya, ṣoḍaśin, vājapeya, atirātra 等々) と成っている。これらは例えば agnīṣṭoma-samsthā という具合に呼ばれる。
²⁶ 尚、昼の捧献の儀で詠われる第二番目以降の4つの *stotra* 達には *prṣṭha* (背骨) という名称が冠される。
²⁷ *Vrātyastoma* 祭第四型の詠称数構成は 9, 9, 15, 17, 21 / 24, 44, 48, 27, 33 / 32, 32 である。Cf. ĀrṣK III, 20, 6. 二番目のストートラから順次に詠称数が増えている部分がある。これを含めて四種ある *Vrātyastoma* 祭は変動しつつ詠称数が上昇して行く型をもつ。
²⁸ 但し必ずしも数が大きい程天界により近いというわけではないことが本稿 VII, a 後半で示される。
²⁹ PvB XVI-XIX. 但しこれは捧献日一日型(ekāha)に関する記述である。尚 PvB 或いは ŚvB のみから全ての詠称数が判明するのはごく一部の祭式に限られるので、対応する ĀrṣK の記述を参照する必要がある。
³⁰ ĀrṣK V, 19, 6: *dve trivṛti stotre / dve dvādaśe / dve pañcadaśe / dve ekaviṃśe / dve caturviṃśe / dve triṇave //6//*
³¹ PvB XVI, 2, 7. Cf. ĀrṣK II, 10, 8: *goṣṭoma stomaḥ //8//*; Varadarāja's *Vṛtti* ad. ĀrṣK II, 10, 8: *pañcadaśaṃ bahiṣpavamānam / trivṛtye ājyāni / saptadaśaṃ mādhyandinaṃ savanam / ekaviṃśaṃ trīyasavanam / soktham iti stomaḥ //32*
³² ĀrṣK III, 13, 2-3: *caturviṃśāv uttarau pavamānau treaklptau //2// samānam itaram pūrveṇa sastomam //3//*
³³ 足りなかった場合については PvB IX, 3, 10 及び KṣudS I, 7, 37 に、多く詠い過ぎてしまった場合は PvB IX, 3, 11 及び KṣudS I, 7, 38 に作法の詳細が記述されている。
³⁴ Cf. Murty [1988], pp. 50-55. 尚、この他にも多くの変種があり、中には音節数が 2 4 でないのにもかかわらず Gāyatri 韻律の仲間に分類される Pāḍaniṣṭ gāyatri (7+7+7) 等もある。2 4 音節の例のみを掲げた。
³⁵ 古典期に於ける *sampad* の様々な用例については Wezler [2000] で包括的に論じられている。但し、その中で本稿の意味のものに関しては p. 453, n. 54 に於いて軽く言及されるに留まる。
³⁶ Cf. Minard [1949-1956], I, pp. 73-74, §. 201-203. そこでは *Śatapathabrāhmaṇa* II, 3, 3, 20; VI, 3, 1, 25; 7, 1, 27; 28; 8, 1, 15; VII, 1, 2, 16; 3, 1, 47; IX, 1, 1, 42; 2, 3, 47; 3, 3, 17; X, 2, 3, 7; 15; 4, 1, 8; XI, 1, 2, 3-9; 13 等が挙げられている。数的符合(*sampad*)について扱った近年の研究には、*Aitareya-brāhmaṇa* が収録する韻律の音節や祭式要素の総計による同様な数的符合の用例に取材した以下のものがある。Cf. Dange [1986].
³⁷ Gonda [1976 b], p. 50: In this connexion the texts use terms such as "commensurate" (*saṃmita*), "identity of sensuous appearance" (*sarūpatva*), and "numerical congruence of different entities by virtue of which these coincide" (*sampad*).
³⁸ Cf. 高木 [1971], p. 24.
³⁹ Carl Friedrich Gauss (1777-1855). 独逸のブラウンシュヴァイク生まれの数学者。数学をはじめ、天文学、測地学、電磁気学等の分野で活躍した。1807年より Göttingen 天文台長の職にあった。彼の業績は Gauss 全集にみる事ができる。(この註記は筆者が付したものであり、『初等整数論講義』には書かれていない。)
⁴⁰ *Śatapathabrāhmaṇa* XII, 3, 2, 1 には幾つかの周期の季節がまとまって挙げられている。
⁴¹ PvB XVII, 13, 17 には *Cāturmāsya* 祭のもつ数 4 と対応させた四年周期の年の観念が述べられている。
⁴² Cf. 林 [1993], pp. 1-43.
⁴³ Cf. PvB XVII, 11, 2.
⁴⁴ PvB XIX, 5, 3-8; Varadarāja's comm. ad. ĀrṣK V, 1: 257. 20: --- *anubrāhmaṇam stomaklptih / caturviṃśiḥ bahiṣpavamānam / aṣṭābhir ājyāni / dvādaśo mādhyandinaḥ pavamānaḥ / ṣoḍaśāni prṣṭhāni / viṃśa ārbhavaḥ / caturviṃśo 'gniṣṭomaḥ iti / ---*
⁴⁵ 20 = 4×5 であるから、4本の足で立つ家畜が 5 あることになる。五種の家畜の例として PvB II, 4, 2 に対する Caland の英訳 p. 23 によれば、Atharvaveda Ś XI, 2, 9, c-d に 5 種の家畜 (牛, 馬, 人, 山羊, 羊) が以下の如く列挙される。AVŚ XI, 2, 9: *atur namo aṣṭakṛtvo bhavāya daśa kṛtvāḥ paśupathe namas te / tavame pañca paśavo vibhaktā gāvo aśvāḥ puruṣā ajāvayaḥ //*
⁴⁶ ĀrṣK III, 12, 3: *ubhau trivṛtau //3//* [*Sādyaskra* 祭第一型・第二型] 両者は詠称数 9。
⁴⁷ Cf. Murty [1988], pp. 65-68.
⁴⁸ ĀrṣK III, 8, 2: *tasya trivṛd bahiṣpavamānam / pañcadaśāny ājyāni / saptadaśo mādhyandinaḥ pavamānaḥ / triṇi ca prṣṭhāni / pañcaviṃśaṃ brāhmaṇacchamsinaḥ / saptadaśa ārbhavaḥ / ekaviṃśo 'gniṣṭomaḥ //2//*

- 49 ĀrṣK V, 18, (1), 3: *dve trivṛtī stotre / dve dvādaśe / dve pañcadaśasaptadaśe / dve ekaviṃśanavadaśe / dve caturviṃśe / dve triṇave* //3//
 50 *saṃvatsara* の末音節の前に *va* が混入したものと解して *saṃvatsara* に読み替える。
 51 *āpt* を *āptvā* と読む。
 52 Cf. PVB XIX, 5, 5: --- *dvādaśamāsāḥ saṃvatsaraḥ saṃvatsaram paśavo 'nu prajāyante tān evāvarunddhe* //
 53 MS にはブラヂャーパティによる創造の過程で Virāj から牝牛(go-)が作られて行くモチーフが語られ、等置も行われる。MS IV, 2, 3: 25. 11: --- *gaur vai vāk gaur virād* --- 言葉は実に牝牛。Virāj は牝牛(go)…。
 54 ĀrṣK III, 7, 7: *trivṛd bahiṣpavamānam pañcadaśatrivṛnty ājyāni / saptadaśo mādhyamīnah pavamāno hotuś ca prṣtham / pañcadaśam maitrāvaruṇasya / pañcaviṃśam brāhmaṇacchamsinah / saptadaśam ācchāvākasyaikaviṃśa ārbhavaḥ / ekaviṃśo 'gniṣtomah* //7//

(参考文献)

- Caland, W., et V. Henry [1906-7] *L'agniṣtoma: Description complète de la forme normale du sacrifice de Soma dans le culte védique*, 2 tomes, Paris: Ernest Leroux.
- Dange, S. A. [1986] “Ritual-Variation and the Principle of ‘saṃpad’: From the Aitareya Brāhmaṇa.” *Adyal Library Bulletin*, vol. 50, pp. 488-511.
- Gonda, J. [1976 a] *Prajāpati and the Year*, Amsterdam: North-Holland Publishing Company.
 ----- [1976 b] *Triad in the Veda*, Amsterdam: North-Holland Publishing Company.
- 林隆夫 [1993] 『インドの数学』: ゼロの発明, 中公新書 1155, 東京: 中央公論社.
- Hopkins, E. W. [1894] “Numerical Formulae in the Veda and Their Bearing on Vedic Criticism.” *Journal of the American Oriental Society*, 16, New Haven, pp. 275-281.
- 井狩彌介 [1989] 「ヴェーダ祭式の思考法と世界観」, 『インド思想 3』, 岩波講座東洋思想第七巻, 東京: 岩波書店, pp. 49-64.
- Krick, H. [1982] *Das Ritual der Feuergründung: Agnyādheya*, Wien: Der österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- 松濤誠達 [1983] 「古代インド祭祀における数の問題: 序章・1, 2, および3の考察」, 『宗教研究』, 256, 第57巻第1輯, 東京: 日本宗教学会, pp. 55-68.
- Minard, A. [1949-1956] *Trois Énigmes sur les Cent Chemins: Recherches sur le Śatapatha Brāhmaṇas*, I-II, Paris: Société d'Édition les Belles Lettes.
- Murty, R. S. [1988] *Vedic Prosody*, Allahabad: Vohara Publishers & Distributers.
- Schayer, S. [1925] “Die Struktur der magischen Weltanschauung nach dem Atharva-veda und den Brāhmaṇa-Texten.” *Zeitschrift für Buddhismus*, München-Neubiberg, pp. 259-299.
- Sharma, B. R. [1976] “Nidhana, The Last Bhakti of Sāman Chants”, *Proceedings of the All-India Oriental Conference*, 27, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, pp. 275-81.
- Tsuchida, R. [1979] *Das sattra-Kapitel des Jaiminiya-Brāhmaṇa (2, 334-370) nach den Handschriften herausgegeben, ins Deutsche übersetzt und erklärt*, Marburg.
- 高木貞治 [1971] 『初等整数論講義』, 第二版, 東京: 共立出版.
- van der Hoogd, J. M. [1929] *The Vedic Chant Studied in its Textual and Melodic Form*,

Wageningen: H. Veeman & Son's Press.

Wezler, A. [2000] "Sampad of Bhagavadgītā XVI reconsidered." *Harānandalaharī*, Volume
in Honour of Professor Minoru Hara on his Seventieth Birthday, Reinbek: I. Wezler, pp. 433-455.

2003.12.17 稿

さとみ えいいちろう 東京大学大学院博士課程

The Invention of Arranging Symbolical Numbers into *stotras* in Soma Sacrifices

——— By taking '*sampad*' as a clue ———

Satomi, Eiichiro

A *stotra* is a complex of melodic mantras of Sāmaveda sung only in the Soma-type of śrauta ritual by three priests of Sāmavedin, who inherit Sāmavedic texts and its ritualistic tradition.

The Soma sacrifices belonging to this type have as many *stotras* as its own samsthā-style requires. For example, in agniṣṭoma-samsthā-styled Soma rituals there are 12 *stotras* on the main day (sutyam ahan), when cups of juice extracted from Soma stalks (it has been recognized as Ephedra today) are poured into the āhavanīya-fire as an oblation, and in ukthya-styled Soma rituals 15 *stotras*.

There are several elements that constitute a *stotra*, such as melodies (sāman), verses (ṛc), etc. Among them, *stoma* is a technical term attached to the number of melodic verses in one *stotra*. In this paper I deal with brāhmanic interpretations of the Kauthuma school of Sāmaveda on the *stomas*.

The Kauthuma school has two extant pieces of brāhmaṇa literature: the *Pañcaviṃśabrahmaṇa* and *Ṣaḍviṃśa-brāhmaṇa*. However, in order to know the details of the *stotra*, which are set in the rituals taken in the two brāhmaṇas, these two books do not give sufficient information, but by referring to *Ārṣeyakalpa*, a kind of sūtra literature, we can obtain important information, especially on all of the *stomas*.

In the first section examples of descriptions of magical analogy or correspondence in the brāhmaṇa literature are given, followed by a definition of magical analogy like that made by Professor Y. Ikari. In the second section the scene in which *stotras* are sung is briefly delineated. Through the description of mythical world creation accompanied by an introduction of *stomas* in the third section, the following passages treat the ritualistic interpretation of *stomas* with examples of *stomas*' scheme with reference to each Soma sacrifice. The fourth section is for the investigation of general meanings of the number of *stotras* and *stoma* itself. In the fifth section simple arrangements of symbolic numbers as *stomas* into each *stotra* and depictions of concrete figures (such as pincers or the body of a cow by taking advantage of difference of each *stomas*) are dealt with. In the brāhmaṇa-literature we occasionally find expressions such as "X is congruent (*sampadyate*) to Y." These expressions, together with names of meters, notably appear in the Sāmavedic schools. In the background of these expressions is the similarity between meter as a number of its syllables and whole *stomas* in one day of Soma sacrifices. For the purpose of investigating brāhmanic interpretations of the *stomas* in a certain ritual from a systematic view, the symbols of congruent numbers in number theory are introduced. One conception of *sampad* is of congruent acts as a fundamental idea. From the above examination, we can conclude that the invention of symbolical holy numbers as *stoma* into the *stotras* is not only a simple arrangement, but also an intricate composition of ideas which use the disposition of numbers.